

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

A Note of Kin Group Endogamy and Social Categories in Lower Egypt

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大塚, 和夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004447

下エジプトの親族集団内婚と社会的 カテゴリーをめぐる覚書

大塚 和夫*

A Note on Kin Group Endogamy and Social Categories
in Lower Egypt

Kazuo OHTSUKA

It is well-known that a paternal parallel cousin (FBD) is the most preferable wife, and indeed marriage with her in particular, or kin group endogamy in general, occurs often among various Middle Eastern societies. Many social anthropologists studying in this area have been interested in this curious custom and have analyzed it from several points of view.

In this paper, I first present an example of kin group endogamy in a village of Lower Egypt where I carried out extensive field research during 1981–82. Nearly half of the total marriages in this group could be defined as a marriage with a classificatory *bint ‘amm* (FBD).

I then discuss a peculiar mode of social categories used in Lower Egypt. Though the *‘āila* kin group seems to be a patrilineal descent group according to the method of recruitment, people are hardly concerned about distinguishing between agnates and maternal kin in their daily conversations. Instead, they always refer to a *qarīb* (relative), a social category strictly differentiated from the other categories such as *gār* (neighbor), *ṣaḥab* (friend), *zamīl* (colleague) and *gharīb* (stranger). Since among most societies characterized by patrilineal descent groups, agnates and maternal kin have two different social roles that are never confused in social life, this strange mode of social categorization is perplexing.

Following Barth's argument, I propose as a tentative explanation that such a peculiar typification of the social world would be logically suitable for a society which has a custom of kin group endogamy. Its practice could result in the complication of kinship and alliance relations within the group itself

* 国立民族学博物館第3研究部

and it could be that one is an agnate, a maternal kin and an affine to the peculiar person at the same time. It is therefore difficult and meaningless in ordinary life to distinguish between a kin from the father's side and that of mother's, both of whom belong to one kin group. They are *qarīb*s who are expected to render mutual assistance on some crucial occasions.

Persons belonging to the *qarīb* social category are internally divided into sub-categories represented as kinship terms. It is said that these sub-categories are ordered according to the degree of closeness to particular person. Thus, an *'amm* (FB) is closer than a *khāl* (MB), who is in turn closer than a *nasīb* (WF or WB) to ego. But it sometimes occurred that a man takes a distant relative for a closer one by using a fictive kinship term.

In conclusion, I believe that the word "*qarīb*", the meaning of which is originally "close" or "near", is important for understanding social relationships and group formation in Lower Egypt. It is noteworthy that Eickelman has paid attention to the Moroccan term "*qarāba*", which is derived from the same Arabic root (Q-R-B) as *qarīb*, as a key concept for studying Moroccan social structure.

- | | |
|---------------|------------------|
| 1. 序一問題の所在 | 3. カテゴリーとしての“親族” |
| 2. 親族集団内婚 | 1) カリーブ(親族) |
| 1) 下エジプトの親族集団 | 2) 近い親族と遠い親族 |
| 2) 親族集団内婚の事例 | 4. 総括 |

1. 序一問題の所在

中東の諸社会において、父方平行イトコすなわち父方オジの娘 (FBD) との婚姻が理想とされ、また実際にもしばしば生じていることは、すでに周知の事実である。この地域の研究に従事する社会人類学者の多くは、この中東特有の現象に着目し、さまざまな立場から論議を重ねてきている¹⁾。かくして、父方平行イトコ婚——時には、“親族集団内婚”という、より一般的な枠組で論じられることもある——の成立、機

1) ファーニーとマラーキーによれば、この型の婚姻研究の視点は、次の四つに整理されるという [FERNEA & MALARKEY 1975: 188]。

- (1) イスラム成立以前の相続規則の残存物とみなす立場 (Robertson Smith)
- (2) FBD 婚を理念的体系とみなし、起源ではなくベドウィン社会におけるその働きの構造的意味を探究する立場 (Murphy & Kasdam)
- (3) 生態的、経済的、政治的諸問題に対する解決法とみなす立場 (Barth, Aswad, Cuisenier)
- (4) 象徴的な表象とみなす立場 (Schneider, Keyser)

能、構造、意味などの解明は、中東地域の社会人類学の最大の課題の一つといえるであろう。

本稿は、筆者が1981年から1982年にかけて下エジプト地方²⁾で行なったフィールドワークで得たデータに主として基づき、同地方にみられる親族集団内婚の実態を紹介するとともに、それと下エジプトの人々が日常生活の場で頻繁に用いる社会的カテゴリーの特徴との関連性を検討することを目的とする³⁾。

本論は次の二つの章から構成される。まず、第2章では、下エジプトの親族集団を概説したのち、ある親族集団における内婚のデータを提示する。すなわち、親族集団内婚が理念のみならず、現在でも実際に行なわれている社会的事実であることを例証する。

このような具体例をふまえ、第3章では社会的カテゴリーとの関連を考察したい。一般に“父系出自集団”と規定できる親族集団をもちながら、下エジプトの人々は“父方親族”と“母方親族”との区分をさほど意味あるものとみていない。日常生活において重要なのは、むしろ、父方と母方を共に含んだ“親族 (qarīb)⁴⁾”という社会的カテゴリーなのである。筆者としては、この特徴は、親族集団内婚が選好されるという事実と密接に関連していると想定しており、それを論証するために、下エジプトにみられる内婚を許容する親族集団のモデルと、たとえば黒アフリカなどにみられる外婚単位となる父系出自集団モデルとの比較を行ないたい。さらに、“親族”と一括される人々も、その内部においては、特定個人との近遠の度合によって区別されることを指摘する。そして、親族名称の擬制的 (fictive) 用例から、遠い関係にある人物をより“近い”者とみなし、自己との関係を再規定する下エジプトの人々の行動様式

2) エジプトは二つの地域に大別される。カイロ以南の上エジプトと以北の下エジプトである。後者は(ナイル)デルタ地域とも呼ばれる。正則アラビア語では、al-wajh al-qibli (南側)と al-wajh al-bahri (北側または海側)といわれる。

3) 筆者のエジプト滞在は、文部省の昭和55年度アジア諸国等派遣留学生制度によって実現したものである。文部省留学生課の方々、および私の勤務先である国立民族学博物館の同僚の方々には、エジプト滞在中さまざまな御迷惑をおかけした。エジプトでの受入れに関しては、中岡三益教授(国際商科大学)、Raouf Abbas 教授(カイロ大)に特にお世話になった。さらにエジプトでは、Ahmad Nāsr 氏、Hāmid al-Azzami 氏、Husām al-Azzami 氏、Nagdat Husām-Din 氏、Shābān Abd-l Hayy 氏に調査を進める上で御協力いただいた。また、カイロでは、アジア経済研究所の長沢栄治氏、長田満江氏をはじめとする皆様に公私共お世話になった。記してこれらの方々に謝意を表させていただく。

4) 本稿のアラビア語の表記は、正則アラビア語 (fushā) のアルファベット順に、', b, t, th, j, h, kh, d, dh, r, z, s, sh, ṣ, q, f, z, 'gh, f, q, k, l, m, n, h, w, y であり、短母音は a, i, u, 長母音は ā, ī, ū で表す。語頭のハムザ、語尾のター・マルブータは略すが、複合語の場合、ター・マルブータを“t”で表記した場合もある。なお、下エジプト地方(シャルキーヤ県の一部を除く)では、カイロ方言に近い口語 ('ammiya) が使われている。フスハとの主な違いは、th 音が t または s 音に、j 音が g 音に、q 音が glottal stop に変わることなどである。なお、アンミーヤの単語もしくは表現をそのまま記す場合には、am. という記号をつけた。

の特性を論じたい。

なお、最終章では、本論の議論を総括したのち、下エジプトで重視される社会的カテゴリー “qarīb” が、モロッコ社会構造解明のキー・コンセプトたる “qarāba” と同根の語彙であるところから、アラブ社会全般にわたる比較研究の可能性も示唆したい。

2. 親族集団内婚

1) 下エジプトの親族集団

国土の九割以上が沙漠におおわれているエジプトにおいて、下エジプト地域は例外的に緑の豊かな農業地帯である。主な作物は、小麦、大麦、トウモロコシ、米、クローバー、綿などであり、カイロ近郊では果実、野菜などの商品作物栽培も盛んである。ドミエッタとラシードの2つのナイルの支流からデルタ中に運河の網の目がはりめぐらされ、人の手の及ばない未開拓地は、ほとんどないといつていいくらいである。伝統的村落 (qariya) の人口は、概ね3～6,000人ほどであり、中には10,000人を越すところもある⁵⁾。

下エジプト地域で親族集団を表す名称として一般に用いられているのは、アーイラ (‘ā’ila) である。また、核家族を指す用語として、ウストラ (usra) もよく使われている。ただし、ベドウィン社会の研究者たちの指摘する親族集団語彙の“文脈依存性”という特徴は⁶⁾、アーイラ、そして稀にはあるがウストラにもあてはまる。すなわち、アーイラの語は、十人程度の大家族から数百人ほどのリニイジ、さらには数千人にもものぼる部族といったさまざまな規模の親族集団を指すことができ、文脈に応じて、異なった社会的実体の名称となるのである。この点を留意しながら、以下では、下エジプトの親族集団を代表する語として、“アーイラ”を用いていく。

メンバーシップ取得の様式から、アーイラは“父系出自集団”と規定しうる⁷⁾。この点に若干の説明を加えておこう。

5) 下エジプト地方の農業活動については、拙稿 [大塚 1983b] で簡単にふれておいた。

6) 「たとえば、バイト (bait) という接頭辞は、数千人にもものぼる集団の名前にもつけうるし、また、一つのテントの居住者を指す場合も適切な用法なのである」[MURPHY & KASDAN 1959: 19]。さらに、Evans-Pritchard [1949]、後藤 [1979] も参照のこと。

7) ベドウィンを含むアラブの親族集団の父系性に関しては、ほぼ定説化されているといえるだろうが、次のような事実も無視してはいけない。それは、親族集団の“社会的格”の問題である。自分たちより格下の親族集団に娘を嫁がせるのは恥ずべき行為とされており、格下の集団の女性との間に生まれた子供は、父よりも母方の集団に実質的に帰属するようである。サウディ・アラビアのベドウィンに関しては、Cole [1975: 71-2, 89-90]、片倉 [1979: 79-80]、上エジプトに関しては、Critchfield [1982: 24-37] を参照のこと。

エジプト人の本名、つまり身分証明書等に記載される名前のあり方に着目すると、彼らの命名システムは、家名 (ism al-'ā'ila, laqab, am. naab) をもつ者とそうでない者へと二分される。公式書類に名前を記す場合、普通は、自分の名前、父の名前、そして祖父 (父の父) の名前または家名の三欄を埋めなければならない。たとえば、ムハンマド・アハマド・ムスタファといった名前があったとする。この男にとって、自分自身の名前はムハンマドであり、父の名はアハマド、そしておそらくムスタファは父の父の名である。

一般にエジプト人にその所属するアーイラの名前を尋ねた時、返ってくる答えは、普通この家名か祖父の名である。後者すなわち、父の父を始祖とするアーイラについては、三代にわたる父系リニイジと規定できよう。一方、家名は特定の個人主体 (ego) からみて、男系的に遡った何代か前の父祖にちなんだ名称であり、形の上では、定冠詞 (al) をもち、形容詞を作る接尾辞 (i) を伴ったものがよくみられる。したがって、これも父系リニイジ、または規模が大きくなった場合には父系クランと規定することができよう。なお、ここで注意しておかなければならないのは、日常生活において、主として言及されるアーイラは、概ねこの二種類であるが、理論的には、男系的に遡った任意の父祖を始祖として、その男系子孫からなるアーイラを抜き出すことも可能なことである。換言すれば、あらゆる男性は、自分の男系子孫たちから構成されるアーイラの始祖候補者なのである。既に記したアーイラという語を使用する場合の柔軟性、すなわち、この一つの語彙がさまざまな規模の親族集団を指しうるという事実が、このようなメカニズムを言語表現の側面から保証している。つまり、部族、クラン、リニイジ、リニイジ分枝等々、規模の異なったこれらの集団すべてが、それぞれ“アーイラ”とよばれうるのである。また、アーイラは大規模のものから小規模のものまで、いわば“入れ子”構造になっているので、家名をもつ者が父の父を始祖とするアーイラの一員であるということも可能なのである⁸⁾。

次に、このような人々から構成されるアーイラの物質的基盤、さらに、アーイラ成員としての彼らの活動のあり方についてもふれておこう。

8) 多数の候補者の中から特定人物が選ばれアーイラの祖となり、固定化されるプロセス、及びそれを保証する諸条件については、今後の課題としたい。なお、キレナイカのベドウィンを調査した E. ピーターズは、彼らの系譜分析の結果、その中に“曖昧な領域”があることを発見した。それは五世代ほど遡った先祖たちに関する部分で、彼らの名前と親族関係について、現存のベドウィンたちの間にかなりの意見の相異がみられたのである。ピーターズは、この領域で系譜操作が行なわれているとみた [PETERS 1970]。系譜操作のメカニズムとそれを固定させる諸条件を検討する場合、ピーターズの議論は参考になる。いずれにせよ、忘れてはならないことは、系譜を分析するということは、すぐれて“知識人類学”的な研究 (馬淵東一) であるということである [馬淵 1974: 221-235]。

まず耕地所有に関してだが、複数の核家族が集まって構成するアーイラの共同所有地というものはなく、耕地は原則的に個人所有である。しかしながら、共通の始祖伝来の土地を一種の共有財とみなす意識はみられ、身内以外への譲渡を避ける傾向にある。遺産相続は、原則的にはイスラーム法（シャリーア）に従っている。たとえば、夫の死亡後、妻は彼の財産の1/8を受取る。残りは子供たちに等分に分けられるのだが、その際、息子は娘の取り分の2倍を取得できる。しかし、実際問題として、この理想型通りに遺産配分が行なわれることはむしろ少なく、当事者間の力関係、とりわけ相続人が未成年の場合には後見人（*waṣī*）制度などが絡まり、配分量の不均等が生じたり、娘の取分が実質的に蔑ろにされることが多いという⁹⁾。

ある程度の規模以上のアーイラは、普通、接客兼集会所（地域により *am. dawwār, muḍifa, mandara* 等とよばれている）をもつ。これはアーイラ内の有力者の属する核家族（*usra*）が住む家屋に附置されていることもあり、また独立した建物として設けられている場合もある。集会所は結婚祝宴、葬儀、祭の時などに当該アーイラの人々が利用するが、村によっては、近隣に住む当該アーイラ成員以外の人々に利用可能な場合もある。

ちなみに、近隣の人々に開かれた場としては、モスク（*jamaʿ, maṣjid*）がある。個人もしくは特定のアーイラによって建造され、時としてその建造者の名を冠せられることもあるモスクには、ムスリムでさえあれば、誰でも入ることができ、礼拝することが許される¹⁰⁾。

アーイラの成員が一堂に会するのは、葬儀（*ʿazā*）や結婚祝宴（*farah*）の時であり、特に前者への出席は一種の義務とみられている。これらの外にも、さまざまな祝事（*munāṣabāt*）の場にアーイラの人々は出席する。しかし、これらの集まりは排他的なものでなく、親族、隣人、友人、知人、同僚なども状況に応じて駆けつけ参加するのである。

9) 相続は土地のみではなく、家畜や家屋も同じ比率で分配される。原則はさておき、実際的な財産見積りや分配過程で、親子・兄弟間に争いが生じることも稀ではない。その場合に、親族（母方オジも含む）以外の者に調停を委ねることはそのアーイラにとって「恥（*ʿaib*）」とされ、男はいないのかと周囲から嘲笑されるという。これも、後にふれる名誉共同体としてのアーイラの一側面である。

10) エジプトのモスクは建造主体の相違によって二種類に分けられる。公立のそれは、宗務省（*wizārat al-awqāf*）の管轄下にあり、礼拝の導師（*imām*）などそこで働く人々は公務員である。これを *maṣjid awqāf* とよび、個人もしくはアーイラが建立した *maṣjid ahālī* とは区別される。後者の運営は個人的奇進によっているもので、導師なども無給のこともあり、建物の維持・改修も思うにまかせないことが多い。そのため、私営モスクの公営への移管の例も多い。そうなると、予算がつき、設備も整う一方で、金曜の集団礼拝前の説教を行なう者も公的に指名され、国からの統制、管理が強化される。

アーイラの結束がもっとも強まるのは、血讐 (tha'r, am. tār) 単位となる時である。これは、地中海地域一帯に広くみられる現象だが、殺された者の一族は、加害者もしくはその一族の者を復讐のために殺す義務をもつとされ、一族の名誉を守る仇討ちが賞賛されるべき行動となっている。これはけっして過去の遺風ではなく、現に1981年におきた例もある。

血讐単位は、理念的には、当事者（加害者と被害者）から五代遡ったアーイラ構成員すべてとされている。しかし、現実には変差があり、私が入手したデータの中には、類比的な父方オジ (FFBS) がオイ (FBSS) によって殺された事件が発端となったものもあった。集めることのできた事例は4つほどで、ここで分析するには質量とも不十分だが、血讐慣習の特徴として、次の2点だけを挙げておこう。

(1) 血讐関係に入った場合、被害者側の者が最初に狙うべき相手は、いうまでもなく殺害者本人であるが、同時に、相手の一族の中でもっとも手強い者も殺傷の標的にする。これは、こちら側の仇討ちが成功した後、相手側からの再度の復讐を企てようとする可能性の強い者を、事前に排除しておこうという配慮から生まれたものである。報復にはやる者がいなくなった相手側は、再度の復讐を試みるより、泣きねいりするか、それとも賠償金の受取りで納得するだろう。このように、血讐は一般に想定されているような流血の抗争のみにとどまるものではない。それは、賠償金の授受をめぐる一連の交渉、世論操作等を含んだ複合的政治現象なのである。

(2) 二つの当事者集団以外の人々、つまり第三者の村人たちは、血讐を両集団間の私的な争いとみなし、事件に関わることを極力避ける。したがって、警察権力の介入は好ましくない事態とみなされ、介入してきた場合にも、目撃者として名乗り出て捜査に積極的に協力する姿勢をとらない。血讐のみならず紛争一般において、公権力の介入は忌避される傾向にあり、村落部では、もめ事を村内で解決するために有力者を中心とした私的な集会 (majlis 'urfi または majlis haqq al-'arab) がもたれることも多い。

血讐がアーイラ内部で対処すべき事件であるのに対し、アーイラの名誉を穢した女性、つまり、未婚のままに妊娠・出産した女性に対するアーイラ成員の対応は若干異なる。“不始末”をした女性を秘かに殺害し、アーイラの名誉 (sharaf) を守るという行動は、現在でも多くのエジプト人にとって、当然視されこそすれ、非難されるべき筋合いのものではない¹¹⁾。今日でも、この種の事件の噂はよく耳にする。この場合も、

11) 他の慣習もそうであるが、このアーイラの名誉のための殺人を実行するのは、階層的には限定されていると思われる。平均像としては、村落部に住み、農業労働者を恒常的に雇えるぐらいの地主といったところであろうか。この階層に属し、“中産階級”と自称するインフォーマントによれば、下層部や上層部では性道德はもっとルーズであり、売春婦 (da'āra) は下層出身者が多く、都会の金持ちの間では費用のかかる処女膜再生手術 (tarqi') も行なわれているという。

被疑者を含むアイラ集団成員は堅く口を閉ざし、第三者も関わり合いを避けるので、警察の犯人逮捕は難しく、逮捕できた場合でも、根強い慣習にしたがったままだという理由で、情状酌量の余地があるという。

制裁の手を下すべき者は、問題の娘の父・兄弟が第一であり、次に父方オジ、さらに母方オジになるといわれている。同一のアイラに属する父、兄弟、父方オジに対し、母方オジは娘とは別のアイラの間人であることもある。しかし、娘の不行跡は両親共に責任があるということで、母の代理としての母方オジが登場してくるのである。この点が、一つのアイラに限定して課せられる血讐の義務との微妙な相違点である。

これらのことから、アイラの“名誉共同体”としての側面が浮かび上がってくる。血讐にしても、不行跡な娘の処理にしても、その他社会生活の多くの局面で、人々は自分の属するアイラの名誉を高め、それができないまでも現在持っている名声を維持し、それを穢す要因を極力排除しようとする。未だに伝統的価値観に執着する大部分の下エジプトの人々にとって、アイラの名誉が穢されることほどの恥辱はないのである。

2) 親族集団内婚の事例

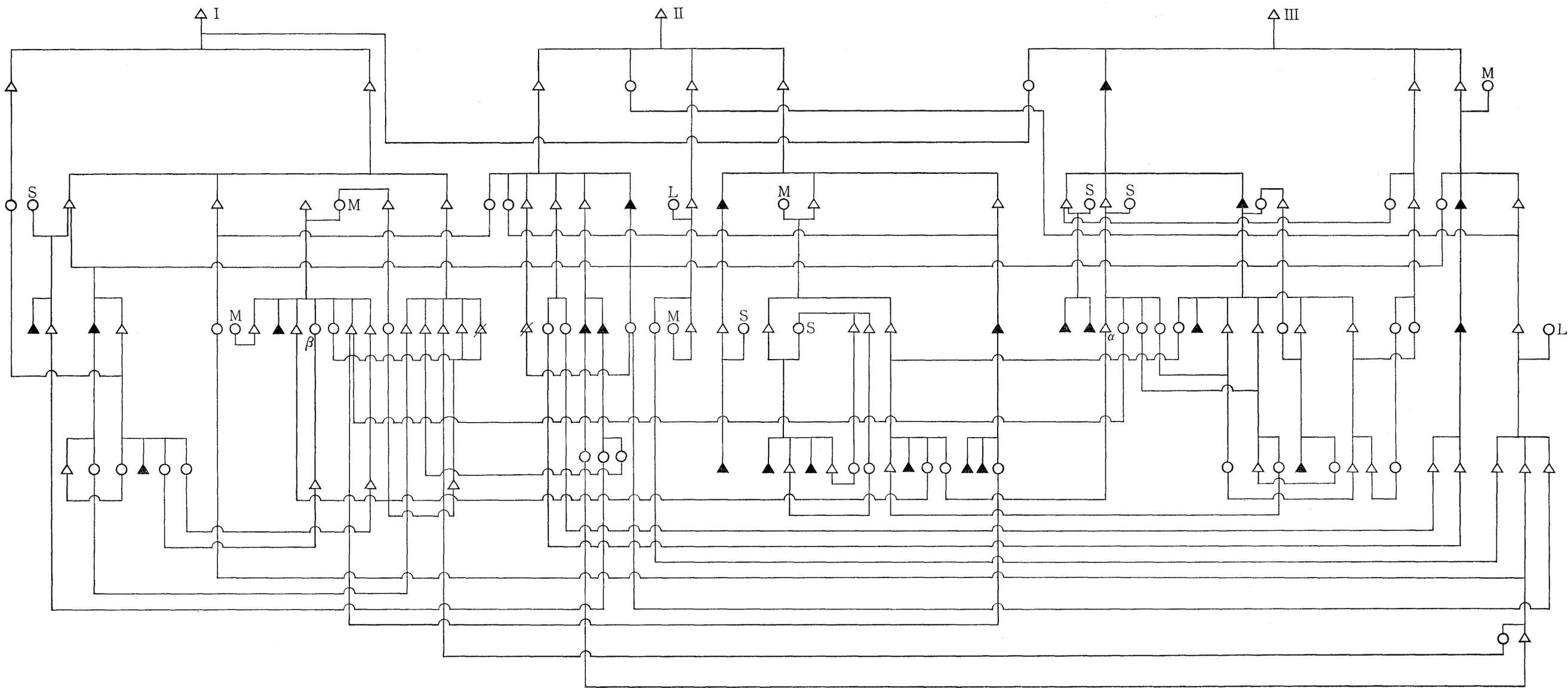
ここでは、本稿の主要な課題である親族集団内婚の具体的事例を紹介する。

図1として示したのは、下エジプト、カリュービーヤ県Q郡N村を基盤とするAアイラの系譜関係である。アイラ内婚を探るという目的のため、女性は内婚に直接関わる者だけを記し、未婚の青少年、子孫を残していない死者も削除した。なお、図に記載されている者のうち一部は、N村を離れ、カイロ市などに居住しているが、祭の時などには必ず帰村し、親族の家々を訪問している。

この系譜は図中のaから1981年10月に取材した情報をもとに作製したものである。aは50歳代の男性で、N村で農業に従事している。「誰が誰の子供で、誰は誰の娘または姉妹と結婚した」といった知識は、aが一番詳しいということで紹介されたもので、このアイラには書かれた系図記録の類はない。aに取材をした集会所(muḍifa)にはAアイラの者たちが絶え間なく出入りし、常に5~10人ほどがわれわれの周囲にいた。その中でも、推薦された通り、aの記憶力は抜群であった。

系譜の分析に入る前に、Aアイラの大半の人々が住んでいるN村およびAアイラ自体の特性についてふれておかなければならない。

N村は郡庁所在地から比較的離れた農村である。下エジプトの他の農村と同じく、



凡 例

△ 男 ○ 女 ─── 婚姻

▲ Aアイラ外の女性と結婚したことが確認された男性

○^L 隣村、AアイラL分枝の女性

○^S N村、Sアイラの女性

○^M N村、Mアイラの女性

I、II、III Aアイラ内の3つの分枝

・ 作図上から、長幼の序とキョウダイの並び方は無関係

・ ~~△~~、α、β、 本文参照

図1 Aアイラの系譜関係および内婚例

小麦、トウモロコシ、綿、クローバー栽培が中心だが、カイロ市に近いので、オレンジ、落花生などの商品作物栽培も盛んである。しかしながら、交通の便は余りよくなく、公共輸送機関である乗合タクシーやバスに乗るためには、耕地をはさんで2キロほど離れた隣村まで歩かなければならない。

この村の特徴として挙げておかなければならないのは、ここが“ファッラーヒーン (fallāḥīn)”の村ではなく、“アラビー (‘arabī)”の村であるということである。

普通、“ファッラーヒーン”は、エジプト“農民”一般を指す語として使われている。日本語の“百姓”と似て、若干の尊敬を含みながら、根底には軽蔑的なニュアンスがある。しかし、ここでは意味が少々限定される。それは“アラビー以外の農民”といった意味になる。では“アラビー”とは何か。この語も辞書を繙けば、“アラブ人”、“アラビア語”さらには定住民に対する“遊牧民”などといった意味が記載されているが、ここでは“アラビア半島から来た人々およびその子孫”といった意味になる。つまり、同じく農業を営んでいるのだが、ファラオ時代からこの地に住んでいる土着の農民＝ファッラーヒーンと区別して、7世紀中葉のイスラーム軍のエジプト侵攻以後、アラビア半島から渡ってきた人々の末裔が、自分たちを“アラビー”と呼び、周囲の“ファッラーヒーン”からもそう呼ばれているのである。勇猛なベドウィンの血を分けもち、預言者ムハンマド生誕の地から渡来した彼らは、周囲の“ファッラーヒーン”を見下す傾向にある。そして、その分だけ、自分たちの血統を誇り、アーイラの名誉を一層重んじがちである。

N村は、このようなアラビー系の三つのアーイラから構成されている。系譜を示したAアーイラの他に、SとMの二つのアーイラがある。N村におけるAアーイラの始祖は、100年ほど前にこの地に落着いた三人であり、それぞれAアーイラ内の三分枝の祖となっている¹²⁾。現在でもアラビア半島のヒジャーズ地方とシリア・ヨルダン方面にAアーイラ系の大集団があり、エジプトの人々との往来もある。ちなみに、図1中のβはヨルダンに住むAアーイラの者に嫁いでおり、その息子はN村の娘と結婚している。

図1を検討しよう。ここでは不明の者を除いて、69人の男性から72件の婚姻事例が得られた。つまり、イスラーム法で認められている複婚のうち、第二婚をした者が3名いたということである。その他、未亡人の再婚例が2件あり、死亡した前夫は△印で示しておいた。

男性を主体 (ego) として、結婚相手をいくつかのカテゴリーに分け、その結果を

12) 始祖三人の系譜関係は不明である。

表1 Aアーイラの男性成員の婚姻相手の分類

	A アーイラ内			母方親族	N 村内	外 部	
	同分枝内	N 村内	隣 村 (L 分枝)			(Mアーイ ラ S アーイ ラ)	(娘がN村 Aアーイ ラに嫁ぐ)
I	6	8	0	1	4	1	3
II	2	1	1	2	4	4	7
III	6	8	1	2	3	1	7
計	14	17	2	5*	11**	6	17

* 内訳：MBD—3件，MZD—1件，他—1件

** 内訳：Mアーイラー6件，Sアーイラー5件

まとめたのが表1である。これによると、A アーイラの内婚率は46% (33/72)となる。後にふれるように、同一アーイラの同年代の成員は、相互に類別的イトコと認識しあうこと、および母方親族との婚姻中4例がイトコ婚であることを加味すると、類別的イトコ婚率は、51% (37/72) となり、過半数を占めてしまう。そして、村外の非親族と結婚し、これまでのところ自分の娘の結婚にアーイラを関与させていない者は17名にすぎない。今回調査することはできなかったが、この17名の中には息子の嫁にAアーイラの娘を選んだ者もいる可能性があり、したがって、自分と子供の二世代にわたってアーイラもしくは村落内婚を行なわなかった者の比率は、確実に24%以下となる。

ここで提示したデータには、いくつかの不充分な点がある。取材の場で、周囲からのチェックが可能だったとはいえ、結局一人のインフォーマントに頼らざるをえなかったこと、息子の嫁選びに際して、夫に圧力をかける妻の力、プロポーズされた娘自身の見解など、女性の側からの視点が欠けていること¹³⁾、系譜操作の可能性をチェックできなかったこと等である。したがって、表1の数字を精密なものともみなすことはできないが、A アーイラの婚姻の一般的傾向を示すものとして扱うことは許されるだろう。

改めて表1をみると、同一分枝内の父方平行イトコ (FBD) 婚、アラビア語でいう bint 'amm 婚は20%にもものぼる。これは、これまで中東諸社会から報告された数字と比較しても、かなりの高率である¹⁴⁾。この比率のもつ意味、それを導いた諸要因に関しては、今後の比較研究を通して明らかにしていきたい。ただ、A アーイラの基盤

13) アルジェリアのカピリー社会を調査した P. ブルドゥーは、子供の結婚に対する父と母との“戦略”の相違に着目している。親族集団の団結から生じる“政治的=象徴的利益”を重視し、FBD 婚に傾きがちな男親に対し、女親は個人的利益の観点前面に出し、子供の配偶者を自分の身近な者の中から選ぶとする傾向にあるという [BOURDIEU 1977: 30-71]。

14) これまでの民族誌を整理したアイケルマンによると、FBD 婚は、クルディスタン部族民の43%から、レパノンの2%まで変差がある [EICKELMAN 1981: 130]。一方、上エジプト、ソハーグ県の農村を調査した木村の報告では、FBD 婚は30~40%にのぼっている [木村 1975: 85]。

が伝統保守的な農村にあること、さらに、周辺のファッラーヒーンとは異なるアラビーであることに誇りをもち、アーイラの純粋性の維持に腐心していること、この二点を指摘しておきたい。精確なデータはないが、他の村落を回った印象として、N村における内婚率の高さは、下エジプト地域においては、むしろ例外的ではないかと思っている。

3. カテゴリーとしての“親族”

1) カリーブ（親族）

前章では下エジプト地方の親族集団、アーイラの物質的・精神的基盤と、その内部で結ばれる婚姻の事例とを紹介した。本章では、下エジプトの人々の親族を中心とする社会的カテゴリー、別言すれば個人主体 (ego) が他者 (たち) を類別化 (typify) する場合に用いる主要なカテゴリーのいくつかにふれ、若干の考察を加えたい。このカテゴリーの特徴とアーイラ内婚傾向とは、歴史的な因果関係を云々することはできないが、論理的な適合関係にあることを指摘できると思う。

前章でアーイラ集団を論じた際、われわれは意識的に“アーイラ集団員”を指す現地語を用いなかった。しかしながら、母方親族とは区別された男系親族＝アーイラ集団員を表すカテゴリーが、エジプトにないわけではない。

エジプト人の人類学者、H・アンマールは、故郷の上エジプト、アスワン県シルワ村の調査報告書の巻末に、次のように記している。「また、父系出自と母系出自との区別も注目すべき重要なものである。前者の親族 (relatives) は“アサブ (‘aşab)¹⁵⁾”——直訳すれば“背骨”——の者といわれ、後者のそれは“肉”という意味の“ラフマ (lahma)” の者といわれる」[AMMAR 1973: 258]。

このアンマールの発言を念頭におき、下エジプトの人々に質問すると、多くの者が“背骨”の親族と“肉”の親族との区別を知っていた。しかし、異口同音に、日常会話ではほとんどこのような用語を使わないという。実際、改めて尋ねた時以外には、このような使いわけを耳にしたことはなかった。さらに彼らがいうには、上エジプトの方がこの区別を意識しているという¹⁶⁾。特に、前章で紹介した内婚率の高いAアーイラ

15) イブン=ハルドゥーンが遊牧民の親族集団統合の原理として説いている ‘aşabiya と同一語根である [cf. 森本 1980]。

16) 上エジプトの近代化が下エジプトに比して遅れているのは事実であるが、それに加えるに、カイロ市や下エジプトに住む人々は、上エジプト人 (ša‘idi) を遅れた田舎者というイメージで描いており、ためらうことなく、見下す傾向にある。彼らが好む冗談 (nukta) の中でも、“サイーディー”をからかい、笑いの材料とする作品が数多くある。

の者は、異なったアーイラ間の婚姻の場合なら別だが、自分たちのようにアーイラ内部での結婚が多いと、父方オジ ('amm) と母方オジ (khāl) の区別はするが、父方親族と母方親族とを一般的に区別することは重要ではないと述べた。

実際、下エジプトの人々にとって、社会生活を送る上で重要なカテゴリーは、父方母方双方を含めた“親族 (qarīb)”なのである。このカテゴリーは、原則的に、隣人 (jār), 友人 (ṣaḥab, ṣaḏīq), 同僚 (zamil), よそ者 (gharīb) などの社会的諸カテゴリーと対比的に用いられており、日常会話の中で頻繁に用いられている語彙のうちの一つである。それにひきかえ、彼らが意識的に“背骨”の親族と“肉”の親族とを区別している場面は、ほとんどないといっていだろう。

祝事や葬儀に出席するのも、“親族”や“隣人”や“友人”であり、イスラームの大祭や預言者生誕祭 (maulid al-nabī) の機会をとらえて訪問しあうのも、“親族”同士なのである¹⁷⁾。仕事・商売上の便宜を計ってもらうのも、就職の斡旋を依頼するのも“親族”の縁故関係を通してであり、決して“背骨”の親族に限定されるわけではない。

このような下エジプトにみられる社会的カテゴリーの特徴は、父系(男系)社会一般にみられるそれとはかなり異なったものである。後者においては、普通、父系親族と母方親族は概念上峻別されるのみならず、異なった権利=義務を割り当てられており、両者はあい異なった社会的役割として確立されているのである。したがって、特定人物が父系親族であるか母方親族であるかということは重要な問題であり、日常会話においても、これら二つのカテゴリーは厳格に区別されながら、頻繁に言及されるのである。しかるに、“父系出自集団”をもつ下エジプト地方では、両者の区別は余り問題とならず、むしろ双方向的親族一般を意味する用語 (qarīb) が人々の会話の中に不断に登場するのである。

このような現象はどのように説明されるのだろうか。これまで父系社会として論じられてきたもののほとんどは、リニージもしくはクラン規模の外婚単位を有する社会であった。しかしながら、下エジプト、さらには中東ムスリム社会全般にわたって、外婚単位は核家族となっており、その他は第一次的オジーメイ、オーバーオイ関係等の婚姻が禁じられているのみである¹⁸⁾。この外婚単位の規模の小ささおよび親族集団内

17) イスラームの大祭には、断食月明けの祭と犠牲祭がある。前者は 'id al-fiṭr または 'id ṣaḡhir とよばれ、イスラーム暦第9月の断食が終わった後、後者は 'id al-aḏḥā または 'id kabir とよばれ、イスラーム暦第12月の10日を中心に数日間祝われる。預言者生誕祭はイスラーム暦第3月12日である [cf. 大塚 1982]。

18) シャリーア(イスラーム法)では、結婚を禁ずる範囲を明確に定めている。ここで述べた他に、妻の母、妻の先夫との間に生まれたつれ子 (step-daughter) が含まれ、彼女たちは、“結婚不可能な女性 (mahrīma)” とよばれる。さらに、“マフリーマ”カテゴリーには含まれないが同様に結婚が禁じられているのは、乳兄弟姉妹、妻の姉妹などである [SCHACHT 1964: 162]。

婚の選好という二つの条件が、一般の父系社会とは異なった社会カテゴリーの用法を生みだしたものと思える。

このことを論証するために、内婚傾向をもつ父系出自集団であるアーイラのモデルと、外婚単位となる父系出自集団のモデル——主として、イギリス社会人類学の黒アフリカ研究から抽出されたもの——とを比較してみたい。便宜的に前者を中東型、後者をアフリカ型と呼んでおく。

両モデルを比較するために、図2を作製した。図2-1(アフリカ型)において、 A_1 集団の成員 b_1, d_1 は、 c_1 にとっては姻族であり、 e_1 にとっては母方親族である。父と息子が同一集団から配偶者をとるということは、条件ではないので、 c_1 にとっての母方親族、 e_1 にとっての姻族は、この図に記載されていない部分にいる可能性が大きい。つまり、特定の個人主体 (ego) にとって、自己の属す出自集団の人々、すなわち男系親族と母方親族と姻族、この三つはそれぞれ別個の親族集団に割りあてられるカテゴリーとなっているのである。父と息子とが同一の集団から嫁をとった場合でも、少なくとも、男系親族と母方親族=姻族とは絶対的に異なった親族集団の成員であり、同一人物が両方のカテゴリーに含まれることはありえない。

一方、内婚が生じた結果としての図2-2(中東型)では、姻戚関係は集団 A_2 と B_2 との間には結ばれず、その点で二つの集団は“他人”同士となっている。このような父方平行イトコ婚によって生じた個々の出自集団の孤絶化を、マーフィとカスダンは「包子囊に被われたようなものだ」[MURPHY & KASDAN 1959] と表現した。そして、 a_2 は、同じ B_2 集団に属している、つまり男系親族であると同時に、 c_2 にとっては姻族、 e_2 にとっては母方親族である。この事態がさらに進むと、図3のようなケースも考えられる。父の兄弟の娘 (FBD) との結婚の結果として生まれ、みず

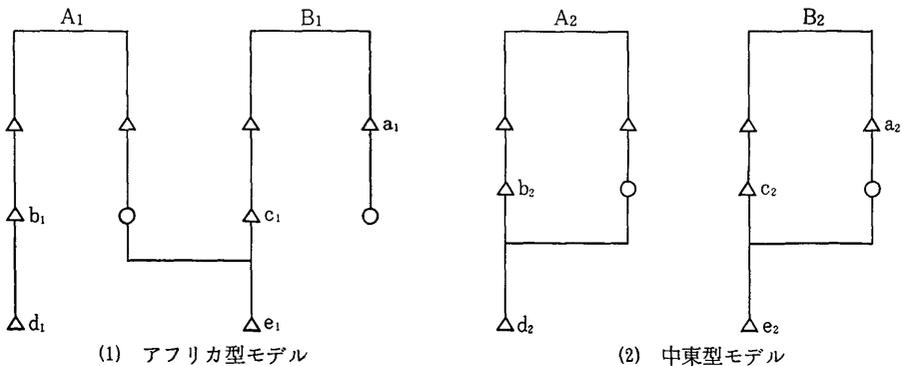


図2

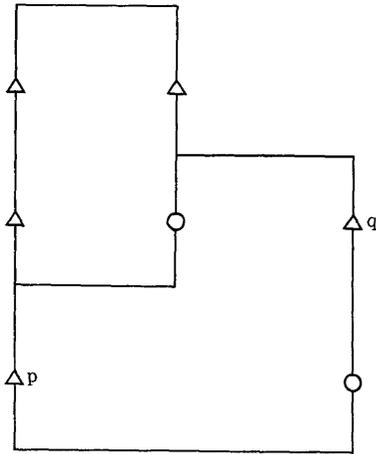


図3 中東型モデルの展開

からも二次的な父方イトコ (FFBSD) と結婚した p にとって, q は男系親族かつ母方親族 (MB) かつ姻族 (WF) なのである。このような状態は, これら三つのカテゴリーを明確に区分し, それぞれが特定の権利・義務を有した異なった社会的役割として確立されているアフリカ型体系と, 著しく異なったものである。

ここまでの議論は, F. バースに多くを負っている。アフリカ型, 東南アジア型の出自体系との比較を通し, 中東の出自体系の特徴をバースは次のように述べている。

「過去における [FBD 婚をはじめとする出自集団内部での] 婚姻の結果, 父方と母方の先祖は重なりあい, 多くの姻戚関係が出自集団成員同士の間で結ばれる。……だからといって, 男系親族を母方親族や姻族から概念的に区別することが不可能なわけではない。しかしながら, 実質的に困難なのは, この概念的区別になんらかの組織だった行動面での内実を与えること, すなわち, なんらかの作業体 (task organization) の基盤とすることである。……これらを互いに異なった役割として行動面での区別をつけていく可能性は明らかに小さく, それらの区別を体裁よく無視していく可能性はかなり大きなものとなる。」 [BARTH 1973: 12]

バースのこの見解は, われわれがここで論じている下エジプトの親族関係の特徴を説明するものとしても妥当と思われる。すでにみてきたように, アーイラ内婚を愛好するこの地域において, 同一人物が“父系親族”かつ“母方親族”の二つのカテゴリーに同時に属することはおおいにありうることである。その当然の帰結として, “父方親族”と“母方親族”とが, 明確に区別された権利・義務を有する社会的役割として確立される可能性, さらには, あい異なった二つの集団を編成する可能性は, 非常に小さくなる。さもなければ, 同一人物が, 両立し難い二つの役割を同時に演じ, 時には, 敵対するかもしれない二つの集団の構成員でありつづけなければならないだろう¹⁹⁾。

もちろん, 概念的に“父方”と“母方”の区別がないわけではない。既述のように, “背骨”と“肉”の親族といったイディオムが, この地域でも知られている。しかし, その区別の意識は, 日常生活の場では概ね背景に退き, そのかわりに, “友人”“隣人”な

どの社会的カテゴリーと概念的に明確に区別された独自の役割として“親族 (qarīb)”という包括的なカテゴリーが多用されているのである。この点において、下エジプトの事例は、前出のバースの中東型出自体系モデルの特徴を保持するものといえよう。

なお、若干の問題が残るとすれば、それは“姻族 (nasīb)”のカテゴリーである。というのも、ほとんど話題にのぼらない父方/母方の区別とは異なり、親族と姻族の二つのカテゴリーは、かなり意識的に使い分けられているからである。

アーイラ内婚の場合、姻族は同時に親族でもある。したがって、核家族間のレベルではこの区別が意味をもつ場面があっても、分節のより上位のレベル、さらには対外的関係においては、両者は同一のアーイラに属する“親族”という役割で行動し、また他者からもそうみなされることが多い。

一方、異なったアーイラ間の婚姻の際には、親族と姻族との区別はより一層意識される。特に、母方的関係すらも存在しないまったくの“他人”同士の婚姻——都市部ではかなりの数にのぼっている——の場合には顕著である。しかし、次の二点に注意しなければならない。

(1) 次節で示すように、親族名称の擬制的 (fictive) 用法によって、“姻族”を“親族”と呼ぶ例がある。さらに、より広い社会的脈絡で話をする時には、姻族は親族のカテゴリーの中に含まれてしまい、その他の社会的カテゴリーと対比されることがままある。例えば、結婚祝宴の招待客数を尋ねた筆者の質問に対し、あるインフォーマントは、「親族200人、友人100人、隣人100人」という分け方で答えた。この親族 (qarīb) カテゴリーの中に、新郎新婦——同一アーイラの成員である——双方の父系・母方親族および彼らの兄姉の姻族が含まれているのである。

(2) “nasīb”の語は、個人間の関係で用いられることが多く、配偶者または子供の配偶者の属するアーイラ全体を“姻族アーイラ (‘āilat al-nasā’ib (nasīb の複数))”と表現することは、言及されるアーイラの規模が大きければ大きいほど稀である。さらに、最近では、夫は、妻の母や姉妹を、nasībの女性形である nasība と呼ぶよりも、ḥamā という別の用語で呼ぶことが、下エジプトでは一般的である。

“親族”と“姻族”の使い分けられる文脈の相違の問題等は、今後の個別的事例研究

19) ここで注意しなければならないのは、次節でも述べるように、父方オジ (‘amm) と母方オジ (khāl) の区別はかなり厳密に守られているという事実である。“父系親族”と“母系親族”という一般的レベルで語った場合には、同一人物が両方のカテゴリーに含まれることがあるが、“父方オジ”と“母方オジ”という、より個別的つまり“集合体”ではなく“個人”を指示する用語の場合には、そのような事態は生じない。すなわち、特定個人にとって、“父方オジ”かつ“母方オジ”である人物は存在しないといえるのである。したがって、ここで述べている“父方”と“母方”の区別の無視という事態も、父方もしくは母方親族一般という集団論レベルの問題であり、特定の父方もしくは母方親族に関する個人レベルのものではない点を了解されたい。

にまたなければならない。しかし、これまでの議論で、下エジプトにおける“親族＝カリーブ”というカテゴリーの重要性は、ある程度明らかになったと思う。ここでわれわれは、この語の本来の意味にも注意を向けなければならない。H. ヴェールのアラビア語・独語辞書の英訳にあたると、“qarib”の項で最初に出てくるのは，near (in place and time), nearby, close at hand, in the neighborhood or vicinity などであり、最後の方に relative が載せられている [WEHR 1976: 754]。すなわち、カリーブは“近い(者)”の意なのである。このように、重要な社会関係が“近遠”という比喩によって表されていることが明らかになった。さらに、近遠とは相対的な尺度であり、したがって、“近い者＝カリーブ”の中にも、より近い者とそうでない者との区別が存在することを予想できる。この問題が次節のテーマである。

2) 近い親族と遠い親族

ここでは親族名称の実用例を手掛りに、“親族”の近遠の問題を検討していく。下エジプトにおける基本的な親族名称は、図4の通りである。これ以外の関係につ

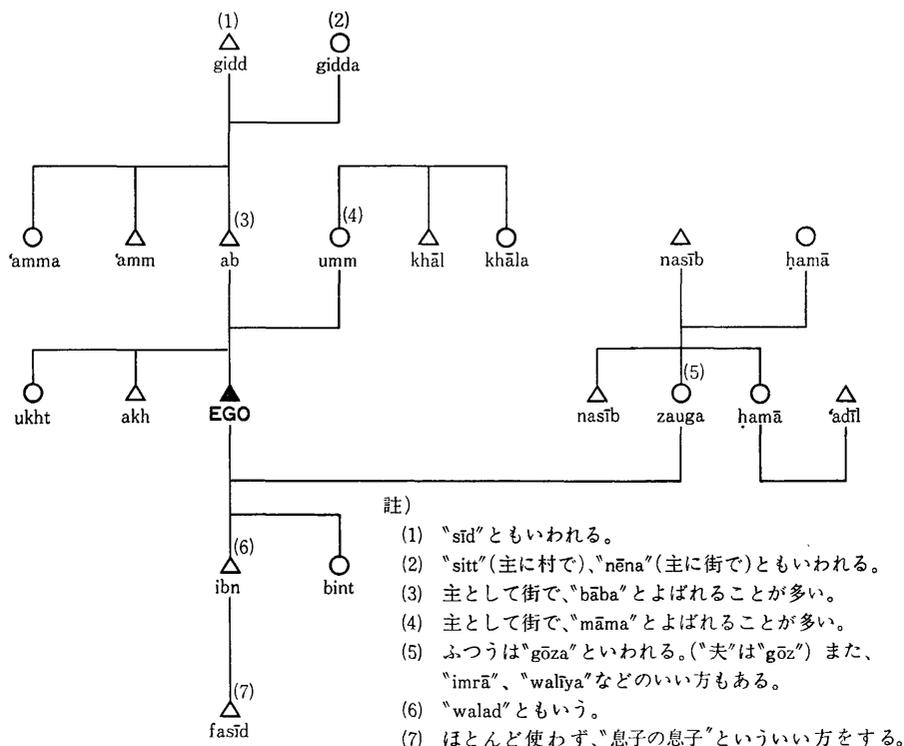


図4 下エジプトの基本的親族名称

いては、複合語になる場合と基本的語彙が“延長”される場合とがある。

複合語になる例としては、ibn ‘amm (父方オジの息子), bint khāl (母方オジの娘), gōza ‘amm (父方オジの妻) などがある。もっとも好ましい結婚相手といわれる bint ‘amm (父方オジの娘) もこの例である。

“延長”の例としては、父方第2イトコ (FFBSS) が、第1イトコと同じく、ibn ‘amm といわれ、その父が ‘amm といわれる場合などである。一般に、両親と“ほぼ同じ年令”で、父との親族関係が強い男性は ‘amm, 女性は ‘amma といわれ、母との親族関係が強い男性は khāl, 女性は khāla といわれる。これを“延長”と記述するのは、FB (父の兄弟) と彼以外の類別的な ‘amm との違いを、下エジプトの人々は充分に意識しているからである。内婚傾向が強く、外婚単位が極めて小さいこの社会でも、すでに述べたように FB と BD (兄弟の娘) の結婚はインセストとして禁じられている。しかし、類別的な FB と BD は、前章の図1にもその例が見られたように、結婚可能なのである。

もう一点注意しておかなければならないことがある。それは類別的なオジ・オバ・イトコ名称は、必ずしも系譜関係に基づく世代区分にしたがうわけではないことである。オジ・オバ名称の“延長”を説明した所で、「両親と“ほぼ同年齢”と強調しておいたように、系譜上の世代関係より、二者間の相対的年令差が、親族名称の実例にみられる両者の“親族関係”を定める時に優先するのである。図5に描かれている人々はすべて、前章でふれた A アイラの成員である。c を ego とすると、a は MMB, b は MMBS なので系譜上の世代によれば、それぞれ, gidd (祖父), khāl (母方オジ) となるはずである。しかし、c 自身から話を聞いたところ、そのようないい方をする場合も稀にはあるが、普通は a を khāl (母方オジ), b を ibn khāl (母方オジの息子) といっていると答えた。それというのも、a は c の父より少し年上であり、b は c より一歳年下だからである。

呼称についても少々ふれておこう。呼称の場合も名称と同じ語彙が使われるが、一般には、相手の個人名で直接呼びかけるのが慣習である。例外は年長者と既婚女性で

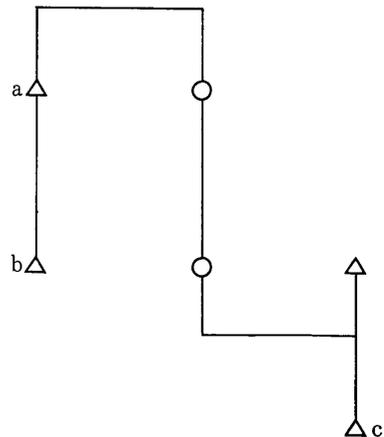


図5 親族名称を決定する際に、相対的年令差が系譜的世代関係に優先する例

ある。

年長者には、親族呼称の使用の他に、尊称 (laqab) を用いることも多い。尊称には次のようなものなどがある。

ḥagg²⁰⁾ ——メッカ大巡礼をすませた者。

shaikh ——宗教的に尊敬されるべき者。

ustāz²⁰⁾ ——元来は知識人に向けられていたもので、大学教授や学校教師に対して使われていたが、今では英語の“Mr.”に近い意味でも用いられている。

muhandis ——エンジニア。工学部や工業専門学校の卒業生。

ustā ——学歴のない職人、自動車運転手。

これらは単独で、または個人名の前につけて、相手への敬意を表す。

一方、既婚女性は、特に初子出産の後には、その子供の名の前に“母 (umm)”という語をつけ、“何某のお母さん”と呼びかけられる²¹⁾。この慣習は殊に村落部では厳守され、近親以外の者が彼女たちを本名で呼ぶことは、大変失礼な行為とみなされている。

本題に戻ろう。男性を中心に考えた場合、親族関係の近遠の尺度は、近い方から順に次のようになっている。

- (1) 父方オジとその息子——ego と同じアーイラの成員である。
- (2) 母方オジとその息子——必ずしも、同じアーイラの成員とは限らない。
- (3) 姻族——これも同じアーイラの成員とは限らず、結婚によって初めて成立した関係である場合もある。
- (4) よそ者——なんら親族関係をもたない他人。

これらを代表的な名称で表すと、

‘amm—khāl—nasīb—gharīb

となろう。

また同じ位置にいる男性と女性、たとえば父方オジと父方オバとを比べたなら、男性の方が近い存在になる。

20) これらは共に口語表現であり、正則語ではそれぞれ、ḥajj, ustādh になる。

21) このような呼び名を kunya という。クンヤは男性にも適用され、“父”を意味する abū を使い、“何某のお父さん”といった表現をされる。なお、“アブー”がついた名前をもつ場合でも、必ずしも“何某の父”を意味するとは限らない。たとえば、初代カリフ、アブー・バクルは、それで一つの名前であり、息子の名がバクルだったわけではない。また、abū は、徒名 (ism al-shuhra) をつける場合の接頭辞ともなる。“よく動き回る (liff)”という意味から、“アブー・リップ”という通称をもつタクシー運転手などの例がある。徒名とは別に、愛称 (ism al-dal') もエジプトではよく使われている。これは、muḥammad を ḥamāda, nabil を bulbul, muṣṭafā を darsh などと呼ぶ場合である。

なお、“近い者＝親族”の中に、さらに近遠の程度の差をつけることは、下エジプトの人々が十分に意識していることであり²²⁾、口語アラビア語にも“近い親族 (arīb uraib)”, “少し遠い親族 (arīb ba‘īd shwwaiya)”といった表現があることを付記しておく²³⁾。

このように、下エジプトにおいて、親族内の近遠の尺度は定まっており、特定の二者間の関係も系譜関係と相対的年令とによって公式的には決定しているはずである。しかし、実際生活の場で親族名称の擬制的 (fictive) な使用法が頻繁にみられることによって、事態は少々複雑なものとなってくる。

親族名称の擬制的な用法に初めて気付いたのは、実地調査のためある村に赴いた時である。村で、私と町に住むエジプト人の助手を受け入れてくれた人物 (助手の友人) が、たまたまその場にあわせた第三者を親族名称を使いながら紹介した。その名称を手掛りに、二人のさらに詳しい関係を尋ねると、実は紹介された関係より遠い関係であることが判明したのである。このような場面に、その後も何回か遭遇したことから、下エジプトにおいて、遠い関係の人物をより近づける親族名称の擬制的な用法があることがわかったのである。以下、4つほど事例を紹介しよう。

(1) ‘amma → ‘amm の例 (図6)

S村でわれわれを迎えてくれた a は、同席していた b を *ibn ‘amm* (父方オジの息子) と紹介した。しかし、実際には、類別的な父方オバの息子であり、属しているアイラも異なる。a によれば、b は隣の家に住んでおり、日常的に親しくつきあっているのだから、同じアイラの成員である“父方オジの息子のような (*zai ibn ‘ammī*)”者だという。

(2) FWB → ‘amm の例 (図7)

カイロから来た友人たちと近くの p 市まで足を伸ばした時、彼らがカイロから雇ってきたタクシーの運転手 c が、われわれの散歩の間にいなくなった。しばらく待っていると、一人の男 d を連れて戻ってきた。この市に住む ‘amm (父方オジ) だと紹介し、久しぶりなので挨拶をしてきたのだという。帰路のタクシーの中で詳しく尋

22) あるインフォーマントは、父方オジは、“同じ血 (*nafs al-damm*)”だが、母方オジは違うといった。また、次のようなエピソードもある。エジプト人の友人宅の午餐に、日本人の T 氏と共に招かれた時のことである。満腹して席をたとうとする私に対し、友人の母は、マイペースで食べ続けている T 氏を指しながら、冗談口調で次のように言った。「どうして食べないんだ。あんたは善い人じゃないね。彼 (T 氏) は私の息子だけど、あんたは父方オジの息子だ (*am. lei mātākulsh. enta mush kuwais. huwa ibni, enta ibn ‘ammī*)」。なお、この発言の背景にあるエジプトにおける午餐招待の意味については、拙稿 [大塚 1983a] を参照されたい。

23) 正則語では、“親族”も“近い”も同じ“*qarib*”であるが、口語では q の音が glottal stop になり、“親族”は“*arib*”、“近い”は形も若干変わり“*uraib*”となる。

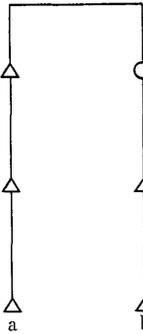


図6 'amma→'amm の例

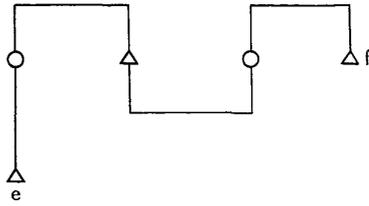


図8 nasib→khāl の例

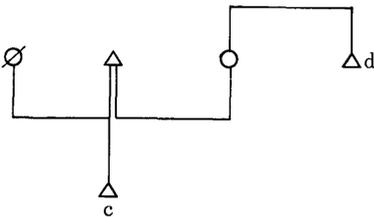


図7 FWB→'amm の例

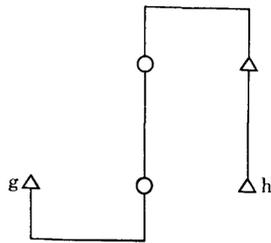


図9 gharib→nasib の例

ねると、cの父はp市近郊の村の出身で、“父方オジ”と紹介したdは、実はcの実母が亡くなった後、父が迎えた後妻の兄弟だという。では“母方オジ”とはいわないのかと問うと、自分は“父方オジ”といっていると答えただけだった。これはFWBつまり厳密には親族でも姻族でもない人物を'ammといっているわけで、いわば他人(gharib)を親族扱いしている例である。なお、エジプトでは一般に、実母以外のFWを母(umm)ということは幼少時を除いてなく、呼びかける時には、年上の女性一般の尊称である“abla”を用いることが多い。

(3) nasīb → khāl の例 (図8)

B市の路傍の茶房でfたちと出会った。その場にいあわせなかったeと私が友人であることを知っているfの仲間たちは、彼をeのibn khāl(母方オジの息子)と紹介した。その言い方に、f自身何ら異論をはさまなかった。しかし、話が進むにつれ、eとfとは図8のような関係にあることがわかった。改めてfに問い質すと、確かに正しくはnasīb(姻族)だといった。後ほど、eにも尋ね、fをnasībではなく、ibn khālという言い方が普通に用いられていることを確認した。なお、系譜的世代からいうとkhāl(母方オジ)が相応しいが、fの方が年下であるため、ibn khālとなっているのである。

(4) gharīb → nasīb の例 (図9)

I 村に g を訪ねた時、偶々、カイロに住む学生 h が訪問中だった。h はわれわれに、自分は g の nasīb (姻族) だと自己紹介した。そこで、g の妻の弟かと尋ねると、いや ibn ‘ammha (彼女の父方オジの息子) だと答えた。そこで、それまで黙っていた g が説明を始め、本当は図9にみられるように、h は g の ibn khāl gōza (妻の母方オジの息子) であると訂正した。h は妻の qarīb (親族) ではあるが、g にとっては gharīb (他人) である。このことを認めた上で、それでも g は h を nasīb というと言った。

これらの個別例の他にも、親族名称が擬制的に用いられる場面は多くみられる。ほぼ同年齢の親しい友人同士が、兄弟 (akh) と呼びあったり、時には冗談と親愛と一抹の皮肉とをこめて相手を、父方オジ (‘amm) と呼んだりすることも一般的である。年令が離れた親しい人物を第三者に紹介する時に、父親のような (zai abī) とか息子のよう (zai ibnī) といった表現を使うことも稀ではない。さらに、私のような異国人に対しても、「あなたはよそ者ではなく、われわれの身内だ (*am. enta mush gharīb, enta aribna*)」といった言い方をして村に受入れ、親族のように (zai qarīb) 遇し、そうすることで他の村人たちからの疑惑をとき、保護してくれるのである²⁴⁾。

ここでこれまでの議論を総括してみよう。前節で指摘したことは、下エジプトにおいて、親族 (qarīb) という社会的カテゴリーは隣人、友人、よそ者などという諸カテゴリーと対比され、重要な社会的役割として確立されているということであった。一方、本節では、その“親族”に含まれる下位カテゴリーの中にも近遠の度合があり、さらに、擬制的な親族名称用法によって、より遠い親族をより近い者にしたり、親族関係のないよそ者をも親族に擬する例も紹介された。姻族、友人、同僚なども、親しい者であれば、少なくとも社交上は親族並みに扱われるのである。したがって、qarīb という概念は、原則的には“近い者=親族”という意味をもちながら、比喩的には“近い者=身内”といったニュアンスで日常会話の中で用いられているのである。親しい関係にある非親族は、少なくとも話者の主観的な世界の中では、もはや単なる“よそ者 (gharīb)”ではなく、むしろ“身内 (qarīb)”なのである。

それではこの仮説の逆も成り立つのだろうか。つまり、親しい非親族がカリーブとなりうるのなら、親しくなく仲の悪い親族はガリーブと呼ばれうるのだろうか。残念

24) イスラームの信者同士の関係も、“兄弟 (akh, pl. ikhwān)”というイディオムを使って表現されることが多い。10世紀のバスラに栄えたシーア・イスマイル派の宗教=政治結社は“純正兄弟団 (ikhwān al-ṣafā)”であり、現在でもエジプトを中心にイスラーム圏に拡まっている原理主義的結社は“ムスリム兄弟団 (al-ikhwān al-muslimin)”である。なお、“兄弟団”はふつう“同胞団”“同志会”などと訳されている。

ながら、この仮説を立証するデータはなく、むしろ、普段争い合っている親族同士でも、公的な社交の場では親族名称で呼びあっているようである。この問題は、擬制的な“縁切り”という研究テーマ²⁵⁾とも絡んでおり、今後の課題としたい。

4. 総括

本稿では、下エジプトの事例にもとづき、アーイラ内婚と“qarib”を中心とする社会的カテゴリーとの関連について論じてきた。その結果、当面の帰結として得られた所見を列記してみると、以下ようになる。

(1) 中東諸社会から報告されている親族集団内婚の選好という慣習は、下エジプト地域の少なくとも一部では現在でも実行されている。

(2) 父系出自集団と規定しうる親族集団（アーイラ）を有しながら、下エジプトでは“父系親族”と“母方親族”の区別はさほど重要ではなく、むしろ、双方向的な“親族(qarib)”というカテゴリーが、社会生活の様々な側面に関与している。

(3) このことは、親族集団内婚が選好されているという事実と、論理的な適合関係にあるものと考えられる。

(4) “qarib”とは元来“近い(者)”という意味であり、その内部にも近遠の度合に応じた内的区分があり、それはいくつかの親族名称によって表現されている。

(5) これらの親族名称、さらには“qarib”という語そのものの擬制的な用法から、より遠い関係にある親族がより近い関係にある者として遇されたり、はては“他人”が“カリーブ”として“身内”扱いされることも頻繁に生じる。

いうまでもなく、本稿は一つの覚書であり今後の調査・研究にまつべき課題は山積している。たとえば、土地を中心とする財の所有形態を通したアーイラ集団の構造分析、さらには通時的な局面におけるアーイラの成立と分裂などの問題は、ここではほとんどふれることができなかった。また、親族名称の擬制的用法に関しても、それらが実際に用いられている状況の検討、すなわち、いかなる条件の下で“遠い人物”が“近い者”に擬せられるのかという問題も、個別事例をさらに集めなければその詳

25) 擬制的な縁切り、すなわち、親族集団内から象徴的異人を創出するという現象は、いくつかのアラブ社会から報告されている。キレナイカのベドウィンでは、息子は父を殺さないものと考えられており、したがって、“父”殺しが生じた時には、その事件の発生自体によって加害者は被害者の子供でないことが“立証”され、母親の姦通によって誕生した非嫡子とみなされる[PETERS 1967: 275]。また、アルジェリア、カピリー地方において“amahbul”[BOURDIEU 1979: 95-96]、北レバノン農村において“makhlū”[GILSENAN 1976: 200-202]とそれぞれいわれている人々には、通常の名誉＝恥辱規範は適用されず、彼らは制外者として恣にふるまわれている。

細を論じることができない。一方、アーイラ内婚の実行率そのものも、無視することのできない問題である。ことに、一般的な印象ではあるが、都市部、さらに農村でも小規模のアーイラでは内婚率は僅少であるように思える。地域や階層などの個々の要因ごとのデータの収集が当面行なうべき課題であろう。

このように、資料面において不十分な点はあるが、下エジプトにおける親族集団内婚の実態と、“qarīb”という概念の重要性およびその用語を擬制的に用いることによって親密な社会関係を確立し、それを維持していくというメカニズムは、ここで一応示しえたと思う。この点において、モロッコ研究者、D. アイケルマンの次のような見解は非常に興味深いものである。

アイケルマンは、モロッコの社会構造を考察する際のキー・コンセプトとして、“近しさ (closeness)”と訳しうる“qarāba”という語に注目する。この概念は、「そうとは気づかれないうちに、明言され認知されている親族関係から党派的結合、保護＝被保護関係、……住居の近接にもとづく結びつきに至るまでの範囲にわたって意味をもつものである。“近しさ”によって、普通は親族関係のイディオムで表現されるほどの強い義務関係が、他者との間に存在するかのようになってしまう」[EICKELMAN 1976: 96 強調は原文]。彼はこの概念を用いて非親族を親族 (qarīb) 化する例をいくつか挙げている [EICKELMAN 1976: 89-121; 1981: 109-115]。

このモロッコからの報告とわれわれの下エジプトの事例との類似性は、改めて指摘するまでもないだろう。二つの事例共に重要な概念は、“qarīb” (下エジプト)、“qarāba”, “qarīb” (モロッコ) といったアラビア語の“Q-R-B”の語幹からの派生語であり、それらは“近しさ”の意味をもつ。この概念によって、親族関係は表現され、時には非親族の擬制的な“親族”化するなわち“身内”化が、現地のイデオロギーの上でも説明づけられる。このような現象がアラブ社会全般においてどこまで普遍化できるかは、今後の綿密な比較研究にまたなければならぬ。いずれにしてもこれは、興味をそそられる研究視点であることは確実である。

謝 辞

本稿のアイデアは、1981年12月、当時カイロ大学文学部講師であった鹿島正裕氏（現金沢大）宅で開かれた勉強会で、「カリーブ vs ガリーブ」と題して発表し、参加した方々から有益な御意見をうかがった。

また、原稿作成の段階では、本館の竹村卓二教授、松沢員子助教授、和田正平助教授さらに黒田悦子助教授から貴重な御批判・御助言をたまわった。

記して、これらの方々に謝意を表したい。

文 献

- AMMAR, Hamed
1973 *Growing up in an Egyptian Village*. Octagon Books.
- BARTH, Fredrik
1973 Descent and Marriage Reconsidered. In J. Goody (ed.), *The Character of Kinship*, Cambridge U. P., pp. 3-19.
- BOURDIEU, Pierre
1977 *Outline of a Theory of Practice*. R. Nice trans., Cambridge U. P.
1979 *Algeria 1960*. R. Nice trans., Cambridge U. P.
- COLE, Donald P.
1975 *Nomads of the Nomads*. AHM.
- CRITCHFIELD, Richard
1982 *Shahhat, an Egyptian*. The American Univ. in Cairo Press.
- EICKELMAN, Dale F.
1976 *Moroccan Islam*. Univ. of Texas Press.
1981 *The Middle East*. Prentice-Hall.
- EVANS-PRITCHARD, E. E.
1949 *The Sanusi of Cyrenaica*. The Clarendon Press.
- FERNEA, R. A. & J. M. MALARKEY
1975 Anthropology of the Middle East. *Annual Review of Anthropology* 4, pp. 183-206.
- GILSENAN, Michael
1976 Lying, Honor, and Contradiction. In B. Kapferer (ed.), *Transaction and Meaning*.
ISHI
- 後藤 晃
1979 「沙漠民の部族構成原理」『月刊シルクロード』5(4): 18-20.
- 片倉もところ
1979 『アラビア・ノート』 日本放送出版協会。
- 木村喜博
1975 「エジプトの農村」『アジア経済』16(10): 76-87.
- 馬淵東一
1974 『馬淵東一著作集 第一巻』 社会思想社。
- 森本公誠
1980 『イブン・ハルドゥーン』 講談社。
- MURPHY, R. F. & L. KASDAN
1959 The Structure of Parallel Cousin Marriage. *American Anthropologist* 61: 17-29.
- 大塚和夫
1982 「イスラームの断食明け祭りと犠牲祭」梅棹忠夫監・松原正毅編『世界旅行——民族の暮らし第四巻, 働く遊ぶ』 日本交通公社出版事業局, pp. 146-153.
1983a 「京の茶漬とエジプトの午餐」『民博通信』21: 13-16.
1983b 「フェッラーヒーン——ナイル川デルタ地帯の農業」『季刊民族学』25: 6-15。
- PETERS, Emrys L.
1967 Some Structural Aspects of the Feud among the Camel-Herding Bedouin of Cyrenaica. *Africa* 37(3): 261-283.
1970(1960) The Proliferation of Segments in the Lineage of the Bedouin of Cyrenaica. In L. E. Sweet (ed.), *Peoples and Cultures of the Middle East*, The Natural History Press.
- SCHAGHT, Joseph
1964 *An Introduction to Islamic Law*. The Clarendon Press.
- WEHR, Hans
1976 *A Dictionary of Modern Written Arabic*. J. M. Cowan (ed.) Spoken Language Service, Inc.